

A DEAN MESSAGE
学部長メッセージ「大人になる」
ということ

外国語学部長 渡部 重美

WATANABE Shigemi
(わたなべ・しげみ)
慶應義塾大学(文学修士)■専 門
18～19世紀の
ドイツ文学・思想■担当科目
ドイツ語圏文学・思想概論、
応用ドイツ語 ほか

ゲーテの言葉

ドイツの作家ゲーテと親交のあったエッカーマンに、『ゲーテとの対話』という著書があります。その中に、同時代の作家シラーが若い頃に書いた戯曲『フィエスコの反乱』を観に行ったエッカーマンが、同じく観劇に来ていた若者たちについて不快感を表明している箇所があります。

エッカーマンによれば、シラーにはもっと洗練された作品もあり、そうした作品が舞台にかかってもほとんど若者の来場者は見かけないのに、『フィエスコの反乱』のような粗野な作品がかかると劇場は若者でいっぱいになる。そうした状況

に嫌悪感を隠せないエッカーマンに、ゲーテは次のように答えます。

「状況は、ゲーテが答えた、「50年前も同じだったし、50年後も十中八九変わりはないでしょう。若者が書いた作品は、やはり若者に一番受けがいいのでしょ。文化やよい趣味の点で世界が進歩すれば、若者たちでさえより粗野な時期を克服してしまうなどは、考えない方がいいでしょうね！ たとえ世界が全体として進歩しても、若者たちはつねに最初から始めなければならぬのだし、一人ひとりが、世界の文化がたどったさまざまな時期をひと通り経験しなければならぬのです。」

プロセスが大切

このゲーテの言葉には、とても重要な真理が含まれていると思います。小さい頃、大人から「やってはダメだ！」と言われたことをやって怒られた経験を、ほとんどのみなさんが持っているはずですが、大人が「やってはダメだ！」と言うのは、大抵、「そんなことをすると○○の結果になる」「そんなことをしたって××にしかならない」ということを知っているからです。大人には結果がわかっている。ですが、子どもは側からすると、むしろ「そんなことをすること自体に、つまり、そのプロセスの方にこそ興味があり重要なわけです。では、どうして大人には結果がわかるのか？ 大人もやはり、子どもの頃に同じようなプロセスを経ってきたからに他なりません。

少々回りくどくなりましたが、結局、私たち人間が成長して大人になるということは、いろいろな段階を一つずつ確認しながらたどり直すということなんです。そもそも、私たちは、母体にいる10か月程度の間に人類がたどってきた気の遠くなるような歴史を一気に駆け抜けて、ヒトとして生れ落ちるわけです。この世に生れ落ちてからも、一つひとつプロセスをたどりながら、経験や知識や判断力などを身につけつつ大人になるのだと思います。

大学での4年間

大学生活4年間は、子どもから大人へ脱皮するためのとても重要な時期です。この4年間は、腰を据えて大人へのプロセスをたどってください。ところで、「大人になる」ための条件とは何でしょうか？ 獨協とも関係のあるドイツの哲学者カントによれば、それは、私たち一人ひとりが持っている「考える力」をフルに使えるようになることです。カントの言う考える力とは、私たちの身の回りにある様々な慣習、社会制度、情報などに対して、これを安易に鵜呑みにせず、その良し悪しや真偽のほどをきちんと見分けることができる力、いわゆる「批判的思考能力」のことです。学生時代には、こうした思考能力を鍛えることが大切です。そのためには、先生方が薦めてくださる良書をたくさん読みましょう。また、国内・国外の友人たちと語り合うことで、自分とは違った他者の意見や考え方にも触れましょう。もちろん、広いくるいろいろなことに目を向けて自分の可能性を試し、自分自身としっかり向き合うことも大切です。悩むこともあるでしょうが、時間をかけて悩むことができるのも学生の特権です。

大学での4年間に考える力を鍛えて、どうか骨太の人間へと成長して行ってください。